

## 「名を呼ぶ神」 ヨハネによる福音書 10章 1～6 節

法人事務局 経理部 財務課 倉橋 基

『はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼である。門番は羊飼いに門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのだから、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。』イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。(ヨハネによる福音書 10章 1-6 節)』。

先ほど、司会者の方に読んでいただきました聖書には、主イエスが、羊飼いと羊の譬えを語られたことが記されています。主イエスは、私たちを羊に、そして主なる神をまことの羊飼いに成らざるとともに、羊飼いは自分の羊を呼ぶときに「名を呼んで連れ出す」のだ、と聖書は語ります。主なる神は、人間を十把ひとからげではなく、一人ひとり大切な人格を持った一個の人間としてみなし、その名前を呼び、導いて下さる、これが聖書の示す神なのだ、ということ、主イエスはお示しになりました。

私たちは、名前を呼びあうとき、そこに、人格的なつながりを感じるのではないか、と思います。〇〇くん、〇〇さん、あるいは〇〇先生……、私たちは誰かの名前を呼ぶとき、そこには、あなたという存在を認めたいです、とか、あなたのことをもっと知りたいです、といった意味が込められています。私たちは、人格的な結びつきを求めるための最初の一手として、お互いに「名前を呼びあう」のではないか、と私は思うのです。

私自身の経験を、少しだけお話したいと思います。私は、今から二十数年前にこの大学を卒業し、いくつかの職業や学校を経たあと、今は職員として、再びこの学び舎に戻ってまいりましたけれども、この大学を卒業した直後、私の最初の就職先は、長野県諏訪市にある、小さな精密機械工場でした。この企業で働き始めたころ、私はその会社の上司たちから「名前を呼ばれない存在」でした。当時、私はどう呼ばれていたか、というと、「おい、そこの大卒」、こう呼ばれていました。この会社では、大卒はとても貴重な存在でした。そしてその言葉は、どのような場面で使われるかというと、「おい、そこの大卒。電話だ、電話。英語！」、こんな風に、呼ばれて(というか使われて)おりました。つまり、大卒は英語ぐらいできるだろう、そういう意味で、英語の電話がかかってくると、だれでもよいから、「大卒と呼ばれる存在」が受け答える、そういう企業風土のある会社でした。私は英語がとても苦手だったので、大変困ったのですが、しょうがないので、電話口で「オーケーオーケー、ノープロブレム」と言いながら、いったい何がノープロブレムなのか自分でもわからずに、とても怪しげな英語で応対していたことを、今でも思い出します。この会社の中には、いわゆる大卒と呼ばれる

人は1割くらいしかいなかったもので、面倒な仕事は、誰でもよいから大卒に押し付ける、そんな雰囲気でしたから、私だけでなく、大学を卒業した者は全て「名前をよばれない存在」でありました。名前を呼ばれない存在、というのは、個人を特定しない、だれでもよい、ということですから、ちょっとさびしく思ったりもしました。

では、私たちは「多くの中のだれでもいい一人」、ではなく、個人が特定された「特別な一人」であれば、私たち人間はそれだけで、お互いに人格的な関係が構築されたり、またさびしくなくなったりするものなのでしょうか。

たとえば、私たちには一人ひとり、学籍番号が振られています。私にも学籍番号はありました。私の学籍番号は「88P」ではじまりました。今よりも桁少ないかと思います。この聖学院大学は1988年の4月にできましたので、私はその第一期生でもありました。あるいは、昨年(2016年)の1月から、マイナンバー制度が始まり、みなさん一人ひとりには、12桁の個人番号が振られたマイナンバー通知カードが送られているのではないかと思いますけれども、たとえば、個人を名前ではなくマイナンバーや学籍番号のような番号で呼び合う社会は、はたして「幸せな社会」と言えるのでしょうか。

個人が番号で管理されれば、個人は特定できますから、個人は「誰でもよい一人」ではなく、ひとまず「特別な一人」とはなり得ます。また、特にマイナンバー制度によって、日本に住民登録のある個人は、全て番号で特定できますから、いわゆる戸籍制度などは不要になり、結果として、個人の名前がなくても、個人が特定できることになります。将来的に、たとえば結婚に際しても、番号同士で、何番の人と何番の人が夫婦であることが分かればよい、とか、あるいは子どもが生まれた時にも、何番の人と何番の人の間の子どもの何番、ということが分かればよいわけですから、そもそも生まれた子どもに名前を付ける必要がなくなるのではないかと、といったことが話題になるわけですが、個人が「名前」でなく「番号」で呼びあう社会がやってきたとき、それでも人間は、人格的な関係を構築できるのでしょうか。人類は、ハッピーになれるのでしょうか。

一方で私たちは、日常的に番号、あるいは数字で呼んでも、不都合を感じないものもあることを知っています。私は現在、経理部というところに所属しておりますが、経理部では日常的に、あらゆるものを数字で表現し、管理をしています。銀行の口座番号も「数字のみ」で表現し、それで意思表示をしています。たとえば現預金を取り扱う際に、「このお金、50086に入金して下さい」とか、「この支払い、1016244から送金して下さい」など、数字を並べるだけで、お互いの意思を確認し合うことができます。この場合、「50086」は、「埼玉りそな銀行宮原支店の本口座(をあらわす口座番号)」を表していますし、「1016244」と言えば、それは、「みずほ銀行大塚支店のメインの口座番号」を表しています。いちいち何々銀行の何々支店の何のための口座、と言わなくても、数字だけで会話が成立します。

けれども、銀行や学校は、人ではありません。法律によって「人」とみなされた「法人格」はありますが「人格」はありません。私たちが人を、名前ではなく、記号や番号で呼ぶとき、そこには、人間を「モノ」として扱い、

人格を軽んじるという考え方におちいる危険性を含んでいるのではないかと、思うのです。逆に、私たちは人を名前で呼ぶとき、そこには、神が私たちにそうして下さったように、人格的な関係の中で「その人のことを覚えている」ということを前提に、その関係性を保とうとしているのではないかと、思うのです。私たちの造り主なる神は、造ったゆえに、私たち一人ひとりのことを、覚えて下さっています。だから主なる神は、私たちの一人ひとりの「名前を呼び続けて」下さっているのではないかと、そんなふうに私は思うのです。

聖書をひも解くと、そこに描かれている人物が、主なる神から名前を呼ばれるシーンが、数多く記されています。けれどもどういふわけか、どちらかという元気の良い時、調子のよい時に呼びかけられているシーンは、あまり登場しません。むしろ、人生に行き詰まり、不安や失望感を抱き、不信や疑いにとらわれている登場人物に対して、主なる神が、その名前を呼び掛けるシーンが多く出てきます。聖書が描く神は、特に私たち人間が、神を見失ったり、疲れたり、不安に思ったりするとき、時には神から離れようとする時でさえ、私たちが覚え、私たちの人格に向けて声を掛け、私たちの名前を呼んでくださる方です。

そのような主なる神の呼びかけに答える者を、神は喜んでくださいます。私たちをいつも愛し、いつも導いてくださる主なる神の声に聞き従うとき、私たちには新しく力が与えられます。私たちは耳を澄まし、私の名を呼ぶ「主なる神のみ声」を聞き分け、それに応えて、主に信頼しつつ、共に歩いていくものでありたいと願っています。

(祈り)主イエスキリストの父なる神さま。よき羊飼いであるあなたが、私たち一人ひとりの名を呼び、この場へと導いて下さったことを覚え、心から感謝申し上げます。どうか私たちが、あなたのみ声を聞き分け、あなたのみ声に聞きしたが、あなたの元へと立ち返り続けることができますよう、一人ひとりの心を定め、守り、導いて下さい。主のみ名によって祈ります。アーメン。

2017年7月6日 聖学院大学 全学礼拝